

「ハングル」能力検定試験の 出題基準および出題内容への検討と提言¹

長谷川 由起子

1. はじめに

1993年に第1回試験が実施され、ほぼ毎年春と秋の2回実施されている「ハングル」能力検定試験²（以下、「ハングル検定」とする）は、日本における韓国語³学習の到達度を測る尺度として、既に一定の地位を固めてきた。特に2000年以降、サッカーのワールドカップ日韓共催を前後する日韓交流ブームや、いわゆる「韓流⁴」ブームの影響により、1990年代に2千人前後だった毎回の受験者数は、2004年秋には1万人を越えるまでになった。また、各大学における検定試験の単位認定制度導入が広まる中で、ハングル検定に期待される役割と社会的責任はますます大きくなっている。

ところが、この試験の出題基準が2006年春に大幅改定され、受験者である学習者はもとより、受験指導を行う教師や韓国語教育関係者らの間からも戸惑いの声が多く上がった。特に初級段階に当たる5級、4級で大幅なレベルアップが行われたため、2006年春季試験実施直後、朝鮮語教育研究会のメーリングリストには、長年、検定対策などの指導にあたってきた研究会の会員である教師らから、5級、4級を受験した多くの学習者がショックを受け自信を失っているとの報告があり、教育現場に困惑と混乱がもたらされたことが窺われた。

ハングル検定の出題基準は、1993年の開始当初、「初歩的、基本的な韓国・朝鮮語を理解し、

-
- 1 本稿は2007年3月24日第24回朝鮮語教育研究会例会（於：京都）での発表内容に、2007年春季試験の出題内容などを加え、全体に加筆修正したものである。
 - 2 NPO法人ハングル能力検定協会が主催し、日本全国で実施されている韓国語試験。試験名にカッコつきで「ハングル」とあるのは、この言語は、政治的立場や考え方の違いにより、朝鮮語、韓国語、コリア語など様々な名称で呼ばれてきた経緯があり、この試験がどのような立場にも偏らないことを示すために文字の名称である「ハングル」を冠したものだが、本来、言語名に文字の名称を用いるのは適当ではなく、やむを得ない次善の策であることを示すものである。
 - 3 本稿では、当該言語を「韓国語」と呼ぶ。
 - 4 1990年代末に中国で韓国の若者向けの歌謡やテレビドラマが爆発的にヒットして、このブームが中国語で「韓流 [hanliu]」と名づけられたが、このブームが韓国に伝えられると共に「韓流 [hallyu]」という言葉が韓国語として定着し、その後、日本や東南アジアに広がった同様のブームも「韓流 (かんりゅう, ハンリュウ)」と呼ばれるようになった。

簡単な韓国・朝鮮語を聞き、話し、読み、聞くことができる」(4級⁵)といった抽象的なめやすだけが示されていたが、1998年に5級の語彙が初めて受験者向けに公開され、2002年には改定された出題基準と5級から準2級までの出題範囲となる語彙・文法・決まり文句などが『ハングル学習の手引き』(以下、『手引き』とする)として出版された。他の外国語検定試験では主催者の手で出題基準としての語彙リストが公表されることは珍しく⁶、ハングル検定の出題範囲公表は特異な例であるといえるが、学習者や教育現場からは受験準備への具体的な指針だとして歓迎された。

2006年の改定では、1, 2級を含む全6段階のすべての級について、改定された出題基準と語彙・文法・決まり文句などのリストが『「ハングル」検定公式ガイド 合格トウミ⁷』(以下、『トウミ』とする)として出版された。これは、ハングル能力検定協会が2004年に実施した受験者へのアンケートの結果、従来の試験が「単語の試験」である、「文法重視」に偏っているなどの指摘がなされ、これを受けて、コミュニケーション能力を重視する方向で各級語彙を見直したものだという⁸。

確かに2002年基準である『手引き』の内容や、これに基づく出題内容に議論の余地はあったことは事実であるし、2006年の改定により改善された面はあったと思う。しかし、後に詳述するように、改善点とともに再考すべき点も多いと言わざるを得ない。

本稿は、韓国語学習に資する今後のハングル検定の望ましいあり方を探るために、2002年と2006年に改定された出題基準と、これに付随する語彙・文法などのリスト、さらにこれらに基づいて作成された出題内容を分析・検討するものである。ただし、個々の出題内容の詳細な検討は他に譲ることとし、本稿ではハングル検定の出題基準改定前後の変化を中心に検討する。

なお、具体的な分析・検討の対象となる出題基準は、学習者・受験者ともに最も人口が多く、韓国語教育現場において教育・学習上、最も基準改定の影響を受けやすい初級段階⁹を中心とし、試験問題は2002年～2007年の毎年春季に実施されたもの、および2006年秋季に実施された

5 第1回(1993年春季)から第4回(1994年秋季)までは1級から4級までの4段階だった。第5回(1995年春)から準2級と5級を加えた6段階体制となり、第18回(2002年春)から第25回(2005年秋)までは準1級が加わった7段階体制であった。2006年の改定で準1級が廃止され、現在は6段階体制である。

6 実用フランス語技能検定試験の場合、主催団体であるフランス語教育振興協会から『フランス語基本500語～文部省認定仏検対応』という形で、5級の語彙のみを扱った書籍が発行されている。スペイン語検定の場合は、主催団体である日本スペイン協会から『基礎スペイン語3000とその用例』が「6～4級で覚えなければならない単語」を扱ったとして出されているが、各級の出題基準語彙が公表されたものではない。

7 「トウミ(도우미)」は「助ける人、案内人」といった意味の韓国語。

8 ハングル検定ホームページ「協会概要」「よくある質問」より。

9 初級の定義はさまざまであるが、本稿ではおおむね、大学での初修外国語としての韓国語2～4単位程度

ものの合計7回分を分析の対象とする。

2. 分析と検討

検定試験の出題基準や出題内容の妥当性等を検討する際、次のいくつかの局面に分けて考える必要がある。

- ① 各級のレベル設定自体が妥当であるか。
- ② 設定されたレベルに対して配分された言語材料（文法項目・語彙）の量および内容が妥当であるか。
- ③ 実際に実施された試験問題が、各級で設定されたレベルおよび配分された言語材料に合致しているか。
- ④ 出題の形式や内容が、試験問題として妥当であるか。

本稿ではこの4つの局面に分けて考察を進める。

2.1 各級のレベル設定

まず、表1および表2を参照しながら、2002年改定の『手引き』と2006年改定の『トウミ』におけるレベル設定、すなわち出題基準の内容を比較する。両者の最も端的な違いは、対象とする受験者の、韓国語を習い始めてからの想定学習時間数である。5級の場合、『手引き』は20時間、『トウミ』は40時間と、ちょうど2倍となっており、4級の場合は『手引き』は50～60時間、『トウミ』は80時間で1.5倍前後、3級の場合は『手引き』は120時間、『トウミ』は160時間で約1.3倍に増えている。

ところで、『手引き』では「〇〇時間学習した程度」となっており、どのように学習したことを想定しているのか、つまり学校での受講時間なのか、自宅での学習時間なのか、受講時間であるとすればどのような教育施設を想定しているのかなどが不明である¹⁰。これに対し、『トウミ』では「60分授業を〇〇時間受講した程度」というように、少なくとも自宅学習は含まれず、一定の進度で行われる授業を想定していることがわかる。また、出題基準の内容もより具

の授業を想定して編まれた教科書がカバーする範囲とし、検定の級では5級、4級を中心に、一部3級を含める。

10 仮に大学での授業を基準とするならば、20時間とは週1回90分の授業を半年（13～15回）受けた場合にはほぼ相当し、40時間であれば週1回1年間に相当する。高校であれば50分授業を週1回1年間受けるとおよそ25時間、週2回受けるとおよそ50時間となる。しかし、当然のことながら、各大学や高校ごとの学力差や、必須科目なのか自由選択科目なのか、クラス規模や教師の資質といった条件によって、また、授業の目標、方法などによって進度および定着度には大きな違いがあると考えられる。

表1 2002年『手引き』による5級～3級の出題基準（下線は筆者による）

5級	20時間学習した程度。ハングルを習い始めた初歩の段階。ハングルのごく短い文を読み、書き、聞きとることができる。1から10まで数えることができる。決まり文句としての簡単な挨拶ができる。語彙約300語、決まり文句としての挨拶16種。
4級	50～60時間学習した程度。基礎的な韓国・朝鮮語を読み、書き、聞きとることができる。初歩的な語句で簡単な挨拶や紹介ができ、ある程度辞書を使うことができる。基礎的な単語で短い文章を書くことができる。語彙約600語、決まり文句としての挨拶34種。
3級	120時間学習した程度。平易な韓国・朝鮮語を聞き、話し、読み、書くことができる。ホテルで予約ができる。郵便局で手紙が出せる。駅などの窓口で用を足す程度の簡単な会話ができる。基礎的な説明文、広告文が理解でき、簡単な文章を正しく書くことができる。語彙約1500語。漢字リスト約300字。

表2 2006年『トウミ』による5級～3級の出題基準（下線は筆者による）

5級	初級前半の段階。60分授業を40時間受講した程度。韓国・朝鮮語を習い始めた初歩の段階。ハングルの母音と子音を正確に区別でき、約450語の単語や限られた文型を用いて作られた文を、読んだり聞いたりすることができる。・決まり文句としての挨拶や簡単な質問ができ、またそういった質問に答えることができる。・自分自身や家族の名前、特徴や好き嫌いなどの私的な話題、日課や予定、食べ物などの身近なこと（事実）について伝え合うことができる。
4級	初級後半の段階。60分授業を80時間受講した程度。・比較的使用頻度の高い約950語の単語や文型を用いて作られた文を、読んだり聞いたりすることができる。・決まり文句を用いて様々な場面で挨拶が出来、事実を伝え合うことができるだけでなく、レストランでの注文や簡単な買い物をする際の「定型化された」依頼や簡単な誘いなどを行うことができる。・自分の力で辞書を引き、知らない語の意味をある程度把握することができる上、頻繁に用いられる単語の組み合わせ（連語）についても一定の知識を持ち合わせている。・短い文を読み、何について述べられたものなのかをつかむことができ、メモ書きや領収書などの実用的な文や、切符や映画のチケットなどを見て必要な情報を得ることができる。
3級	中級前半の段階。60分授業を160時間受講した程度。・私的で身近な話題ばかりではなく、親しみのある社会的出来事についても話題にできる。事実について正確に伝えることができる上、指示・命令、依頼や誘いの受諾や拒否、許可の授受など、様々な意図を大体で実現することができる。・決まり文句以外の表現を用いて挨拶を行うことができる。単語の範囲にとどまらず、連語など組合せとして用いられる表現や、使用頻度の高い慣用句、ことわざなども理解し、使用することが可能である。・日記や手紙など比較的長い文やまとまりを持った文章を読んだり聞いたりして、その大意をつかむことができ、テキストの中で用いられる接続表現や指示語の意味を正確に解釈したり、それらを正しく用いることができる。

体的かつ詳細なものとなり、連語などにも言及し、コミュニケーション能力を重視するなど、最近の言語教育の流れを反映したものとなっている。

想定される学習時間に関して、英語を除く他の主な外国語の検定試験の出題基準¹¹（表3～表5；各検定試験ホームページ資料より一部を抜粋）を参考に考えてみよう。

表3 実用フランス語技能検定試験各級の内容と程度

※5級，4級，3級，準2級，2級，準1級，1級の7段階のうちの5級～3級

5級	初歩的な日常フランス語を理解し，読み，聞き，書くことができる。標準学習時間：50時間以上（大学の授業で週1回1年間）語彙：約500語
4級	基礎的な日常フランス語を理解し，読み，聞き，書くことができる。標準学習時間：100時間以上（大学の授業で週1回2年間）語彙：約800語
3級	フランス語の文構成についての基本的な学習を一通り終了し，簡単な日常表現を理解し，読み，聞き，話，書くことができる。標準学習時間：200時間以上（大学の授業で週2回2年間）。語彙：約1,500語

表4 ドイツ語技能検定試験各級の検定基準

※4級，3級，2級，1級の4段階のうちの4級～3級

4級	ドイツ語の初歩的な文法規則を理解し，日常生活に必要な基本単語が運用できる。（約60時間受講）
3級	ドイツ語の初級文法全般にわたる知識を前提に，簡単な会話や文章が理解できる。（約120時間受講）

表5 中国語検定試験各級の認定基準

※準4級，4級，3級，2級，準1級，1級の6段階のうちの準4級～3級

準4級	中国語学習の準備完了。学習を進めていく上での基礎的知識を身につけていること。（学習時間60～120時間。大学の第二外国語1年度前期修了，高等学校における第一年度通年履修，中国語専門学校・講習会等において半年以上の学習程度）
4級	中国語の基礎をマスター。平易な中国語を聞き，話すことができること。（学習時間120～200時間。大学の第二外国語1年度履修程度）
3級	自力で応用力を養いうる能力の保証（一般的事項のマスター）基本的な文章を読み，書くことができること。簡単な日常会話ができること。（学習時間200～300時間。大学の第二外国語2年度履修程度）

まず，フランス語の場合は，明確に大学の授業を週1回1年間受講した場合を一つのタームと見なしている。大学の90分授業を週1回30週受ければ45時間となるが，5級はこれをカバーする「50時間以上」，4級はその倍である「100時間以上」の学習を終えた学習者を主な受験者

11 ハンゲル検定では「出題基準」としているが，フランス語検定では「内容と程度」，ドイツ語検定では「検定基準」，中国語検定では「認定基準」と，それぞれ異なった表現となっている。これらをほぼ同じ概念と見なした。

として想定としている。

ドイツ語の場合、級数が少なく、単純な比較はできないが、「〇〇時間受講」とあることから、フランス語と同様、授業を基準にしているようである。しかし、具体的に、例えば4級の「60時間」が、大学の週1回の授業であれば1年間に相当するのか、1年半に相当するのか、或いは大学の授業とは関係がないのかななどを、規定から読み取ることにはできない。

中国語の場合も大学の第二外国語を基準としているが¹²、準4級が想定する第二外国語1年度前期の学習時間数を60~120時間と見なしている。90分授業で週2回（半年で約45時間）の授業を想定しているものと思われるが、これに加えて、自宅学習時間が含まれている¹³か、習得状況の個人差を考慮して幅を持たせたものであろう。そうだとすれば、これが『トウミ』5級で40時間、フランス語検定5級で50時間と見なしている時間数に相当することになる。

各検定の主催者ごとに学習時間数に対する捉え方が一様ではないが、少なくともフランス語と中国語では、大学の授業を週2回1年間もしくは週1回2年間（4単位相当）以上受けた程度を4級と見なし、その半分（2単位相当）を5級（中国語では準4級）と見なしていると考えられる。そうすると、『手引き』の4級では期間がそれよりやや短く、『手引き』5級の20時間というのは、他の外国語と比べても突出して短い。改定された『トウミ』で、4級・5級ともに、フランス語、中国語と足並みが揃ったと言えそうである。

『手引き』のレベル設定の低さは、図1~図4に示した各検定試験の合格率（各検定試験ホームページ資料により作成）にも現われている。各検定試験の最下級とその次の級における最近7~9年間の合格率を比較すると、ハングル検定で2001年頃から突出して高い水準にあることがわかる。他の言語の中でも中国語の場合はやや乱高下が見られるが、フランス語では60~80%、ドイツ語では50~80%の水準を平均して保っている。中国語でも90%を超えたのは98年春だけで、あとはおおよそ50%前後から80%の範囲に収まっている。これに比べると、ハングル検定5級は2002年から2005年にかけて90%前後に達し続けており、他の言語と比べた場合にハングル検定は合格しやすいという印象を与えていたと言わざるを得ない。

12 2007年に、準4級の欄に高等学校以下のくだりが加えられた。

13 大学設置基準では第21条に「1単位の授業を45時間の学修を必要とする内容をもって構成する」とあり、1単位の相当する大学の外国語科目の授業時間数が通常22.5時間であることから、自宅学習を授業時間と同等程度行うことが前提とされている。

図1 実用フランス語技能検定試験4級・5級の合格率

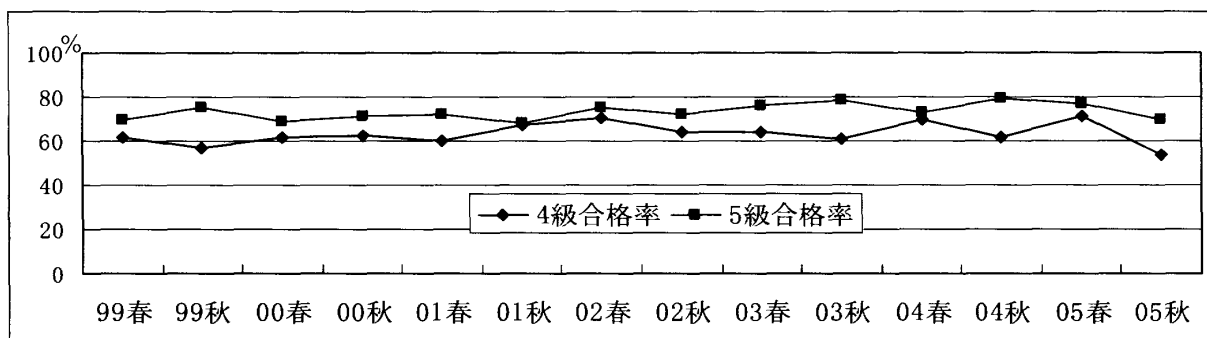


図2 ドイツ語技能検定試験3級・4級の合格率

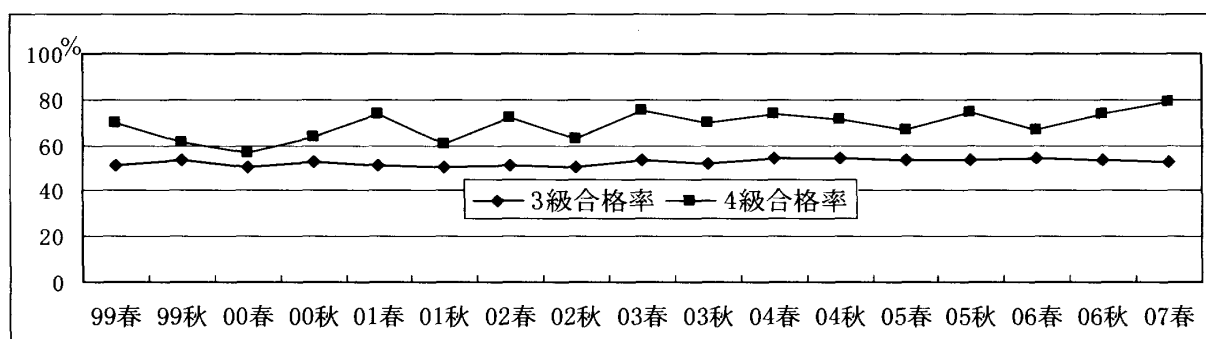


図3 中国語検定試験4級・準4級の合格率

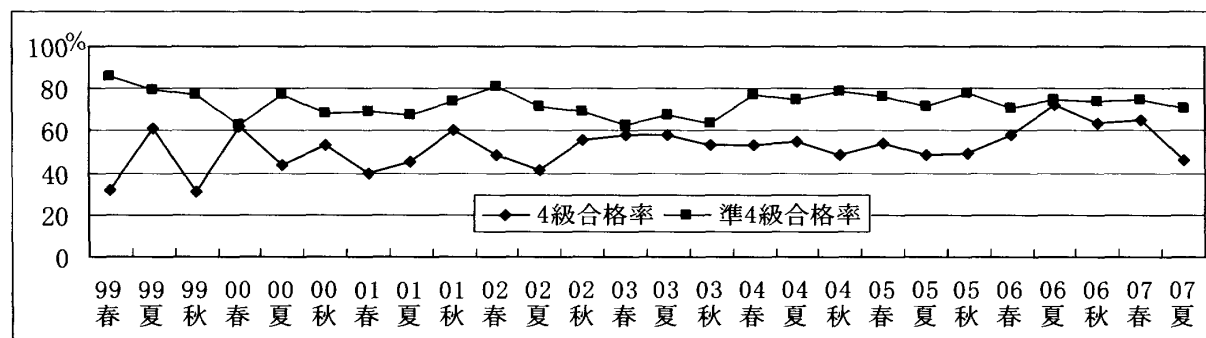
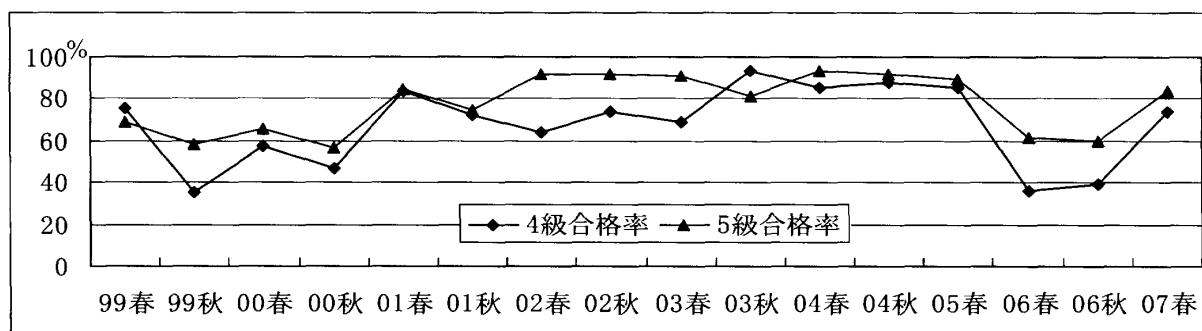


図4 「ハングル」能力検定試験4級・5級の合格率



『手引き』の基準下での試験が突出して易しい試験となっていた背景には、いくつかの要因が考えられよう。ひとつには、韓国語は日本語との文法的・語彙的類似点が多く、学びやすい言語とされる半面、入門期に限ってはハングルという初めて接する文字を覚えなければならず、発音の学習にも困難が伴うため、初期段階の敷居が高い言語とされる。したがって、この時期をなんとか乗り越えた学習者に5級合格というごほうびを与え、次の段階に挑戦する勇気を鼓舞しようという意図があったと考えられる。

また、韓国語の学習は、在日韓国・朝鮮人にとって意義深いことはもちろんのこと、日本人にとっても、最も近い地域である朝鮮半島の言葉や文化を学ぶことは、国際人としての教養を高め、視野を広め、自国の言語や文化をより深く理解する上でも極めて有効な営みであるにもかかわらず、従来、日本と朝鮮半島との間の特有の歴史的関係や社会的状況から、あまり積極的に学ばれることがなかった。そのため、韓国語学習に対して他の外国語の学習とはやや異なる特別な意義付けをする雰囲気があって、低いレベル設定が容認されてきたという面があったのではないか。

しかし、あまりに低いレベル設定は検定試験としての社会的意義を損ないかねず、学習者に対しても、より質の高い学習への意欲をそいでしまうことになりかねない。また、2000年以降の一連のブームをきっかけに、韓国に対する従来のようなマイナスイメージは払拭され、いまや韓国語は他の外国語と何ら変わることはない、したがって、特別扱いする必要もない「ごく普通の外国語」となった。にもかかわらず、ハングル検定だけが突出して低いレベル、高い合格率にあるということは、決して好ましい状況ではなかったと言えよう。

こういった状況を是正するために、2006年、ハングル検定の基準が他の外国語と足並みを揃える方向で改定されたとするならば、それは妥当な措置だったと言える。筆者もそういう意味で、基準改定そのものには肯定的な評価を下したい。

しかし、改定された『トウミ』の基準となった途端、合格水準が極端に落ち、改定後2回目の試験でも低水準が続いたのち、3回目で今度は極端な高水準となっている。改定直後の合格率の急落は、受験予定者へのレベル変更の周知が十分に行われなかったことによるものと考えられる。ことができようが、その後の乱高下はレベル設定の不安定さを示すものであり、「学習成果に正確な評価を下す」という「設立の理念」に適っているとはとうてい言いがたい。

さらに、基準に基づいて各級に配分された語彙・文法項目が適切だったかどうか、その試験問題への適用状況が適切であったかどうかは、基準そのものとは別の観点から検証する必要がある。以下で、これらの点について具体的に検証していく。

2.2. 各級に配分された語彙項目・文法項目

上で検討したように、現在のハングル検定5級が大学の週1回の授業で1年間（2単位）に相当するレベル、4級が同様の2年間（4単位）に相当するレベルであるとするならば、その期間の学習成果を評価し、到達度を確認するためには、これらの級に配分された具体的な言語材料が、それぞれに相当する教育課程の実情に照らして、量的・内容的に妥当なものでなければならないはずである。そこで、本項では、ハングル検定各級の語彙・文法などの項目の、相当する教育課程で使用されている教科書の語彙・文法などとの一致度を検討する。

2.2.1 語彙項目

上で各級の想定する学習時間数の比較を行ったが、異なった方針で編まれたと考えられる『手引き』『トウミ』の各級相互間の位置づけをより明確にし、その妥当性を検証するために、語彙規模について検討してみよう。

表6は『手引き』『トウミ』各級の出題基準として示された語彙項目の数と、文法項目を除くその他の項目の種類と数を、想定される学習時間数の長さの順に並べたものである。各級の学習時間数と語彙数はおおよそ比例しており、一見きれいに対応しているように見える。

表6 検定各級の想定学習時間数と語彙項目数など

	『手引き』 5級	『トウミ』 5級	『手引き』 4級	『トウミ』 4級	『手引き』 3級
学習時間数	20時間	40時間	50～60時間	80時間	120時間
語彙項目数	約300語	約450語	約600語	約950語	約1500語
その他	挨拶16種	挨拶31種、 接辞など32 項目	挨拶34種	挨拶14種、 接辞など42 項目	漢字約300字、 連語175項目

しかし、各出題基準に示された、いわゆる「公称語彙数」と、実際に出題されうる語彙的項目数とは異なっていることを考慮する必要がある。というのも、『手引き』の場合、試験問題が出題範囲として明示された語形と語義の範囲を超えることがないのに対し、『トウミ』では「5級の語彙リストに登場する語の組み合わせが連語の問題として出題されることになる」として、語彙リストの各単語の参考欄「連語など」に該当する例を挙げている。4級の場合は、これに加えて、「問題作成者の判断において当該級の水準に相当すると認められる単語を、試験問題全体の10%程度まで¹⁴リスト外から出題されることが許される」としているため、出題

14 2006年の改定当初は「10%程度まで」とされていたが、2007年には「5%内」に改められた。

されうる語彙的項目数はさらに増えることになる。

連語とは、一般には特定の語と語の組み合わせにより新たな意味が付与される場合を言う。例えば、「보다」という動詞は、普通「(目で物を) 見る」という意味が基本的な意味であるが、「일을 보다 (仕事をする)」「시험을 보다 (試験を受ける)」という連語における「보다」には、基本的な意味とは異なった派生的な意味が付与されている。このような連語における派生的な意味は、学習者にとっては新たな学習項目となるはずである。

連語について『トウミ』では「一定の組合せで用いられ、それぞれの単語の意味をそのまま解釈すれば基本的に理解可能な類の表現を指す」(p.284)と定義しているが、5級語彙リストにおいて「보다」は「見る」の意味でしか掲載されていないにもかかわらず、「시험 (試験)」の「連語など」の欄に「시험을 보다 (試験を受ける)」というサンプルが挙げられている。同様に5級語彙リストでは「먹다」「가지다」は「食べる」「持つ」の意味しか示されていないにも関わらず、「마음」「아이」の「連語など」の欄に「마음먹다 (決心する)」「아이를 가지다 (妊娠する)」が上げられている。

『手引き』では、こういった連語を3級以上で扱うとし、そのリストが別途示されていたが、『トウミ』では5級の語彙リストに登場する語同士の組み合わせでさえあれば、派生的な意味が明示されていなくても、5級の出題範囲とするとしている¹⁵のである。

また、『トウミ』の「連語など」の欄には、いわゆる連語だけでなく、派生語・合成語・縮約形なども含まれており、その数は5級で約90項目にのぼる。このため、公称語彙数は約450語（実際に数えてみると489語）であるが、「連語など」のサンプル約90項目、さらに、接辞など32項目を足せば『手引き』4級の約600語にほぼ匹敵することになる。

したがって、受講時間数で見た場合、『トウミ』5級および4級は、それぞれ『手引き』5級と4級の間、および4級と3級の間位置づけられるように見えるが、語彙規模では『トウミ』5級は『手引き』4級にほぼ匹敵し、『トウミ』4級も『手引き』3級に近いレベルとなるのである¹⁶。

次に、これらの語彙項目が、相当するレベルの教育課程で使用される教科書に現れる語彙項目とどの程度一致しているかであるが、この点については、長谷川・李(2006)が詳しく分析

15 しかも、これらは「あくまでもサンプルであり」(『トウミ』p.20)「出題の範囲を制限するものではない」(『トウミ』p.284)として、例示されていないものも出題しうることを宣言している。

16 『手引き』3級の場合、漢字約300字が加わり、『トウミ』4級では「問題作成者の判断において当該級の水準に相当すると認められる単語を全体の10%程度までリスト外から出題されることが許されて」(p.282) いるため、もはや出題範囲としての語彙規模の正確な比較は困難である。

している。

長谷川・李（2006）は、国際文化フォーラム（2005）の調査に基づき、日本の大学で最も多くの学生に使用されていると推定される15種の韓国語教科書を対象に行った語彙調査である。語彙とは一般には語（形態素）の集合体を言うが、長谷川・李（2006）では、連語や複合語、定型句、決まり文句など、学習者によって語彙的な位置づけで学習されると考えられる形式を「語彙的学習項目」という単位と見なし¹⁷、15種の教科書それぞれに対し、どのような語彙的学習項目が現れるかを調査した。

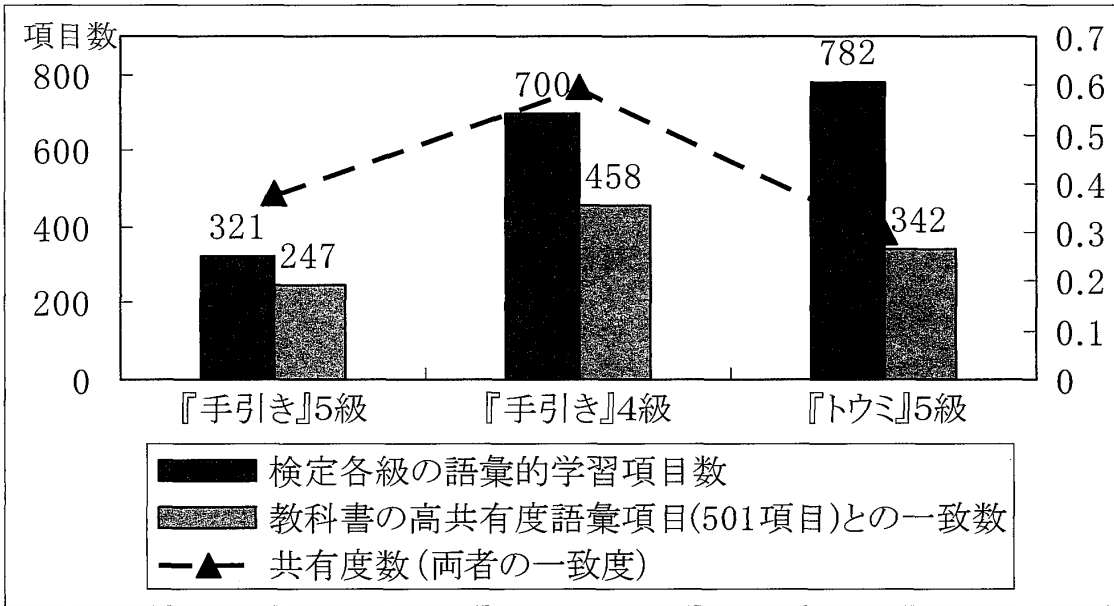
さらに、15種のうち半数にあたる8種以上の教科書に共通して現れた語彙的学習項目（本稿では「高共有度語彙項目」とする）を、教科書の1巻目のグループ、2巻目までのグループそれぞれの中から抽出し、これをハングル検定の語彙リストをはじめとする各種教育用語彙リストと比較するなどの分析を行った。

図5は15種の教科書1巻目の高共有度語彙項目と、相当するレベルであるハングル検定各級の語彙との間の一致数を、検定各級ごとにその語彙リストから得られた語彙的学習項目数と共に棒グラフで表し、それぞれ項目総数に占める一致項目数の割合を掛けたものを共有度数として折れ線グラフで示したものである。項目総数が多ければ一致項目数は大きくなるが、共有度数は下がる。『手引き』5級は語彙総数自体が少ないため一致項目数は少ないが、教科書の語彙との共有度数は高い。これは語彙規模が小さければ、多少異なった観点から選定しても、重要語彙には共通のものが多くなるためであると考えられる。しかし、ほぼ同水準の語彙規模である『手引き』4級と『トウミ』5級を比較すると、『トウミ』の語彙項目と教科書の高共有度語彙項目との一致度は『手引き』より明らかに低い結果となっている。

図6も同様に15種の教科書2巻目までの高共有度語彙項目と、相当するレベルである検定各級の語彙との間の一致数を、検定各級ごとにその語彙リストから得られた語彙項目総数と共に棒線グラフで表し、それぞれ項目総数に占める一致項目数の割合を掛けたものを共有度数として折れ線グラフで示したものである。ここでも語彙規模的に相当する『手引き』3級と『トウミ』4級、『手引き』4級と『トウミ』5級との間で、それぞれ後者のほうが教科書の高共有度語彙項目との一致度が前者より低いことがわかる。

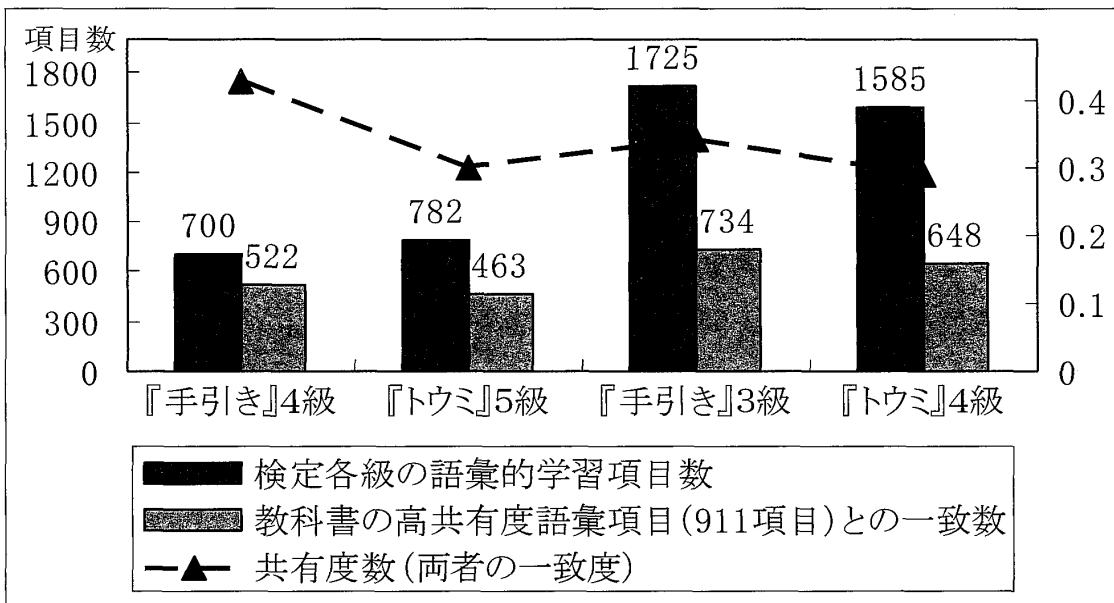
17 したがって、形態素単位ではなく、複合語、派生語、決まり文句、連語なども語彙的学習項目と見なし、多義語も日本語との対応関係に鑑みつつ複数の語彙的項目とした。また、日本語の「名詞+する」「名詞+される」に当たる「名詞+하다」「名詞+되다」の構成をなす動詞の場合、ハングル検定の語彙リストなどでは名詞を見出し語とし、(되, 하)のような形で動詞派生が可能であることを示しているが、これら名詞と名詞から派生した動詞も別項目と見なしたため、長谷川・李（2006）による語彙規模は各公称語彙数よりかなり大きくなっている。

図5 教科書1巻目の高共有度語彙項目と検定語彙項目との一致数および一致度



※ 共有度数 = 共有項目数 / 語彙項目総数 × 共有項目数 / 高共有度語彙項目数

図6 教科書2巻目までの高共有度語彙項目と検定語彙項目との一致数および一致度



※ 共有度数 = 共有項目数 / 語彙項目総数 × 共有項目数 / 高共有度語彙項目数

次に、教科書1巻目の高共有度語彙項目と『手引き』4級、『トウミ』5級との間で相互に一致しなかった項目を具体的に見てみよう。

まず、15種の教科書1巻目の高共有度語彙項目501項目のうち108項目が『手引き』4級に挙がっておらず、『トウミ』5級には149項目が挙がっていなかった。15種の教科書2巻目までの高共有度語彙項目911項目のうちで『手引き』3級に挙がっていなかったのは179項目、『トウ

ミ』4級に挙がっていなかったのは234項目だった。

このうち、教科書1巻目における共有度のさらに高い、12種以上の教科書に共通して現われた語彙項目233項目のうちから地名や人名などを除き、『手引き』4級、『トウミ』5級に挙がっていなかったものは次の通りである。

『手引き』4級 (18項目)

動詞 : 듣다 (聞く), 걷다 (歩く)

形容詞 : 맵다 (辛い), 어렵다 (難しい), 춥다 (寒い), 덥다 (暑い), 어떻다 (どうだ)

数詞 : 서른 (30), 마흔 (40), 쉰 (50), 예순 (60), 일흔 (70), 여든 (80), 아흔 (90)

その他 : 월 (~月), 전 (前), 약국 (薬局), 오이 (キュウリ)

『トウミ』5級 (25項目)

動詞 : 듣다 (聞く), 걷다 (歩く)

形容詞 : 맵다 (辛い), 바쁘다 (忙しい), 어떻다 (どうだ), 재미있다 (おもしろい)

数詞 : 서른 (30), 마흔 (40), 쉰 (50), 예순 (60), 일흔 (70), 여든 (80), 아흔 (90)

名詞 : 공원 (公園), 점심 (昼食), 고향 (故郷), 사전 (辞典), 회사원 (会社員)

라디오 (ラジオ), 전 (前), 약국 (薬局), 오이 (キュウリ), 중국 (中国)

미국 (米国)¹⁸

その他 : 제 (私の)¹⁹

『手引き』4級、『トウミ』5級とも、変則用言や二桁の固有語数詞が排除されていることがわかる。これらの語彙の活用が初級学習者にとって難しいと判断され、排除されたのであろうが、ほとんどの初級教科書で扱われているということは、初歩の段階でもこれらの語彙の重要性が認められるということではないか。このような語彙は、例えば『トウミ』5級が日変則用言については特に例示をしているように、活用形態そのものを問うような問題を避けるなど、扱い方に工夫すればよいのであって、語彙そのものを排除する必要はないのではないだろうか。

18 国名については巻末資料「各種名称一覧」を参照せよ(『トウミ』p19)とあり、「중국」「미국」もそこに挙げられているが、世界の国名・地域名のリストは140項目にも上っており、5級受験者がこれに対応して試験に臨むとは思えないので、ここではリストにないものとして扱った。

19 コミュニケーション上も極めて重要と思われる「제(私の)」が除外された理由は、おそらく「제」は「저의」の縮約形であって、語として認めないという形態素主義の立場を採ったからであろうが、韓国語教育の立場からすれば、「제」は明らかに一つの学習項目であり、検定の語彙リストには掲載すべきであろう。

また、『手引き』4級の場合は変則用言を一切扱わないことを明言しており、文法的な難易度が排除の理由であることが明らかであるが、『トウミ』5級の場合、同じ変則用言でも「어렵다 (難しい)」「춥다 (寒い)」などは含まれているのに「뻘뻘 (からい)」が含まれていない。「コミュニケーション能力を重視」する方向で改定が行われたはずの『トウミ』5級で、「뻘뻘」「바쁘다 (忙しい)」「재미있다 (おもしろい)」のようにコミュニケーションの上で極めて重要と考えられる語彙が排除されている点は問題なのではないだろうか。「점심 (昼食)」「회사원 (会社員)」「사전 (辞典)」「전 (前)」などが排除されている点も同様である。

「약국 (薬局)」「오이 (キュウリ)」「라디오 (ラジオ)」などは、音が日本語とよく似ていたり、発音練習の際に用いやすいといった理由で教科書にはしばしば現れるが、初級段階でのコミュニケーションの上ではそれほど重要な語ではなく、排除は妥当な措置と言えるだろう。

次に、15種の教科書1巻目にはほとんど現れなかった(15種中0もしくは1種に出現)のに検定各級の語彙リストに挙がっているものは、『手引き』4級で61項目、『トウミ』5級では238項目に上った。それぞれの特徴を挙げると、以下の通りである²⁰。

『手引き』4級に挙げられた項目のうち教科書にほとんど現れなかった61項目では、「많이 드십시오 (たくさん召し上がれ)」「새해 복 많이 받으세요 (明けましておめでとうございます)」「수고하십니다 (お疲れ様です)」「잘 먹겠습니다 (いただきます)」などの決まり文句が20項目にのぼり、「너무하다 (あんまりだ)」「모자라다 (足りない)」「빨다 (洗濯する)」「공부시키다 (勉強させる)」「걱정되다 (心配になる)」「보도되다 (報道される)」などの動詞が17項目、「잘못 (過ち)」「소금 (塩)」「불편 (不便)」「뜻 (意味, 意志)」「불 (明かり)」「그제 (一昨日)」などの名詞が14項目、あとは「어느 (とある～)」「그것 (あれ)」「이십 (二十)」「삼십 (三十)」などの二桁の漢語数詞、「송이 (～輪)」などの依存名詞が数個あった。

これらの中には日常の動作や思考、身近なものごとや状態などを言い表すための基礎語彙と認められる語彙や決まり文句が多い。しかし、初級の学習段階では韓国語の言語構造を理解し運用できるようになることが重視されるため、教科書ではその過程に必要な語彙から優先的に採用され、結果的に人間生活における基礎語彙であっても、必ずしも初級の教科書の語彙と一致するわけではないのだと思われる。

もちろん、初級段階では学習段階に伴う語彙の偏りが生じるのは止むを得ないこととし、だからこそ検定の語彙リストで、その不足する部分を補うべきだという考え方もありうる。しかし、そうすると学習者は、授業を通しての半年なり1年なりの学習とは別に、新たに単語を覚

20 項目数が多いため、それぞれの特徴を挙げ、問題点を指摘するにとどめる。

えなければならないことになる。そもそも、単語リストを機械的に暗記するだけの学習は不自然であるだけでなく、十分な理解と定着が図れるとは言いがたい。単語は文脈や場面を通じて、音と意味と用法を体験することで獲得するのが望ましいということを考えれば、検定試験の語彙リストを教科書の語彙偏りの解消のために利用することは最低限にとどめるべきではないだろうか。

なお、漢語数詞の場合、二桁の数は一桁の数詞の組合せで表現できるので、敢えて語彙リストに載せる必要はないのではないだろうか。

次に、『トウミ』5級に挙げられた項目のうち、教科書にはほとんど現れなかった238項目には次のような特徴がある。

「내일 또 봐요 (明日また会いましょう)」「어서 드십시오 (さあ召し上がれ)」「용서하세요 (お許してください)」などの決まり文句が27項目、「뜨다 (<目を>開ける)」「편지하다 (手紙を書き送る)」「노래되다 (?歌われる)」「타다 (<隙に>乗じる)」「찾다 (求める)」「앉다 (<埃が>積もる)」などの動詞が48項目、「다섯 (5人)」「그날 (その日)」「속 (心中)」「요리 (手並み)」「이름 (評判)」などの名詞が46項目、そのほか「누구 (誰か)」「어디 (どこか)」など疑問詞の不定用法、「말소리 (話し声)」「바닷물 (海水)」「속옷 (下着)」などの合成語、「사진기 (写真機)」「학생증 (学生証)」などの派生語、そして「시험을 보다 (試験を受ける)」「병이 들다 (病気になる)」「마음을 먹다 (決心する)」などの連語がかなりの数にのぼる。

これらのうち、「타다」「찾다」「앉다」「속」「요리」「이름」などは、それぞれ「乗る」「探す」「座る」「中」「料理」「名前」といった基本的な意味でなら、どの教科書にも登場する。しかし、そこから派生した意味、多義語の周辺的な意味は、教科書の1巻目に現われることはほとんどない。にも関わらず、『トウミ』5級ではそういった語義までを出題範囲としている。

また、「그날 (その日)」「이분 (この方)」などは、辞書に名詞として立項されている語ではあるが、初歩段階の1巻目の教科書では普通「그 날」「이 분」のように2語として扱われている。「이 (この)」「그 (その)」「저 (あの)」などの冠形詞を学んだばかりの学習者にとって、後続語との分かち書きや複合の問題に触れること自体、余計な学習負担であり、2語として扱って何ら差し障りのないものは、学習の段階性を考慮して、あえて立項せず、出題内容においても2語として扱うべきではないだろうか²¹。

一方、同じ合成語でも「강물 (川の水)」「차길 (車道)」「내일모레 (あさって)」などは、『トウミ』5級では見出しとして立項されず、「비 (雨)」「물 (水)」「차 (車)」「길 (道)」「내일 (明日)」「모레 (あさって)」など個々の単語の意味と形の組み合わせであるとしてサンプルに挙げられ、出題範囲とされているが、これも「韓国・朝鮮語を習い始めた初歩の段階」の学

習者を対象としたとは思えない乱暴な話である。

例えば「강 (川)」と「물 (水)」という語を知っていたとしても、合成語に数多く触れた経験が乏しく、韓国語の合成語のしくみに関する知識の乏しい初級学習者にとっては、「강물(川の水)」が合成語であることを推察すること自体、容易なことではない。

「차길 (車道)」の場合、二つの意味で初歩段階の学習者には推測困難である。まず「人」が挿入された合成語の存在と、その適用範囲を知らなければならないが、初級教材では普通そこまで扱われることはない。また、日本語と類似の語構成であれば、多少なりとも類推は容易となろうが、日本語では「車道」を「しゃどう」と音読みし、「くるまみち」のように訓読みすることはないため、その意味でも推測は困難であろう。

「내일모레 (あさって、もうすぐ)」に至っては、形の上では「내일 (明日)」と「모레 (あさって)」の合成であっても、意味的にはそうではない。日本語の「明日あさって」と同じとも言えない。そもそも「내일」「모레」を覚えたばかりの学習者に「모레」のことを「내일모레」とも言う、などと教えれば混乱するだけではないか。

名詞と助詞などが組み合わさって事実上副詞のように使用される「다시는(二度と)」「언제나(いつでも)」「잘만 (うまく～さえ<～れば>)」「끝없이²² (限りなく)」なども「連語など」のサンプルとして意味・用法を記さずに挙げてあるが、これらはもはや構成要素の単純な組み合わせとは言えず、副詞句として別途に項目を立てるべきものである。また、そもそも初歩段階の教科書に、このような副詞句が使われるような文自体、登場するとも思われない。

「누구」「무엇」「어디」などの疑問詞の場合、15種の教科書すべてに疑問用法は現われていても、不定方法はまったく登場しない。つまり、教科書執筆者は初歩段階の学習者にとって疑問用法は必須だが、不定用法は難しいため、もう少し学習が進んだ段階で導入すべきだと考えているのである。ところが【トウミ】5級基準にはこれらがすべて入っている。

名詞や動詞の多義語の扱い方にも配慮が求められる。例えば、「이름」の意味を「①名前、名称、②評判、③名誉、名分」とし、「타다」の意味を「①乗る、②滑る、③利用する」としてあるが、教科書1巻目に「이름」の②③の意味や「타다」の③の意味が登場するはずがない。同じ語から派生した意味であっても学習の段階性を考慮し、それぞれの意味にふさわしい級に

21 「그날」「이분」は一語として扱い、「그 시간」「이 사람」は二語として扱うといった区別の根拠を理解するのは、中・上級者でも容易ではない。こういった表記は、数多くの文章に触れる段階になってから体験的に身につけていくべきであろう。

22 「끝없이」は独立した副詞として扱うのが一般的であるが、2006年5級基準では「끝」の「連語など」の欄にサンプルとして掲載されている。

配分するのが望ましいと思われる。

以上のように、『トウミ』の語彙選定、語義選定には、学習過程への配慮が欠如していると思わざるを得ない例が数多い。何よりも、5級が初級前半の段階を標榜するならば、初級前半で使用される教科書の語彙を調査することから始めなければならないはずであるが、どの教科書にも載っているものが採用されていなかったり、逆にどの教科書にも載っていないもの、5級相当の学習段階ではどう扱われそうにないものが数多く採用されていることからして、そういった作業は行われていないか、軽視されているものと判断せざるを得ない。

2.2.2 文法項目

次に、文法項目について検討する。

教科書に現れた文法項目については、하세가와・이수경(2002)で構築した枠組みに長谷川・李(2006)で調査対象とした教科書15種の文法項目を入れ込んで、15種中8種以上に共通に現れた「高共通度文法項目」を抽出し、ハングル検定の各級の文法項目も同様の枠組みに入れ込み、両者を比較する。(ただし、発音関連項目と代名詞、数詞関連項目など、ハングル検定のリスト上で語彙的項目となっているものは除いた。)

まず、教科書1巻目の高共有度文法項目は44項目、相当するレベルである『手引き』4級の文法項目が57項目、『トウミ』5級が49項目、教科書2巻目までの高共有度文法項目は82項目、同じく『手引き』3級の文法項目が124項目、『トウミ』4級が131項目であった。

高共有度文法項目の中で、相当するレベルの検定各級の文法項目リストから漏れていたものを(1)~(4)に、反対に、検定各級の文法項目リストには挙がっているが、相当する教科書にはほとんど出現しない(15種中0もしくは1種に出現)ものを(5)~(8)に挙げた。

(1) 教科書1巻目の高共有度文法項目中、『手引き』4級にないもの。

-ㄹ(意思) -ㄹ(推量) -(으)러 -(으)세요(命令)
ㄷ変則活用 ㅂ変則活用

(2) 教科書1巻目の高共有度文法項目中、『トウミ』5級にないもの。

-ㄹ(推量) -(으)면 -(으)러
ㄷ変則活用 ㅂ変則活用

(3) 教科書2巻目までの高共有度文法項目中、『手引き』3級にないもの。

-(으)ㄴ 수 있다/없다 -는데 N께서

(4) 教科書 2 卷目までの高共有度文法項目中, 『トウミ』 4 級にないもの。

-(으)ㄴ 수 있다/없다 -는데 -기 때문에 -는 것 같다
-(으)ㄴ 것 같다 -(으)면서 -아/어/여 드리다

(5) 『手引き』 4 級にはあるが, 教科書 1 卷目にほとんど現れないもの。

N만 N까지(までに) -지요(平叙) N처럼 N 뿐

(6) 『トウミ』 5 級にはあるが, 教科書 1 卷目にほとんど現れないもの。

N에 (~につき) N(으)로 (資格) N가/이 아니라
N만 N와/과 같이 N 같다 N와/과 같다
-거든요 -고 가다 -고 오다 -지요(平叙)

(7) 『手引き』 3 級にはあるが, 教科書 2 卷目までにほとんど現れないもの。

N까지 (までに) N마저 N에 관해(서) N뿐
-아/어/여서는 안 되다 -는 것이다 -(으)ㄴ 것이다

(8) 『トウミ』 4 級にはあるが, 教科書 2 卷目までにほとんど現れないもの。

N와/과 달리 N 뿐 N 끝에 -(으)ㄴ 끝에
-(으)ㄴ 다음(에) -(으)ㄴ 후(에) -(으)ㄴ 이상(은)
-아/어/여 줘요 -(으)시죠 -(으)시겠어요?
-(으)려고요 -아/어/여서요 -지가 않다 N가/이 -고 싶다
-(으)면 좋다 -아/어/여야 -(으)ㄴ 생각(이다)
-고 가다 -고 오다 -왔/였/였겠- -겠- (可能)

『手引き』『トウミ』ともに, 相当するレベルの教科書に現れる文法項目と一致しない部分があるが, 改定された『トウミ』でその数が増えているのは残念である。

語彙項目もリストを暗記するだけでは身につかないものだが, 文法項目はさらにリストだけで習得するということは考えにくい。(1)~(2)に挙げたものは, 多くの受験者が既に知っている項目であるにも関わらず試験で問われることはなく, (5)から(8)に挙げたものは, 受験者が教科

書を通じてほとんど習っていないものであるにも関わらず、試験で問われることがあるということである。

大学の教科書には現れない語彙や文法項目であっても、他の初級の学習媒体に現れているか、多くの初級学習者が接するであろう韓国語による言語行動にしばしば現れるというのであれば、それをリストに入れることに問題はなかろう。しかし、そのような裏づけのない項目をリストに挙げておくということは、それらの項目を検定受験だけのために機械的に暗記するよう学習者に要求することに等しい。特に初級段階に相当する検定の基準作成にあたっては、学習目的や学習の段階性などを考慮しつつ文法と語彙を綿密に絡めて編まれたであろう初級教科書の文法・語彙項目の出現状況を最大限反映すべきではないだろうか。初級段階の検定語彙および文法項目の選定にあたっては、この点を最も重く考慮してもらいたいものである。

2.3 出題基準と試験問題

次に、各級に配分された基準となる文法や語彙と、実際の試験問題が合致しているかどうかを見ておこう。ここでは初級前半とされる『手引き』4級と『トウミ』5級について検討する。

2.3.1 語彙項目

前述のように、公称語彙数は『手引き』4級が約600語、『トウミ』5級が約450語であるが、長谷川・李（2006）の語彙的学習項目の数では、『手引き』4級が700項目、『トウミ』5級が782項目であり、両者の重複項目数は490項目である。これは、改定により語彙がかなり入れ替わったことを物語っている。

図7は、2002年春から2005年春までの4級の試験問題（春季のみ：18, 20, 22, 24回）と、2006年春から2007年春までの5級の試験問題（秋季含む：26, 27, 28回）の計7回の試験問題の内容について、それぞれの異なり語彙数と、問題内容に『手引き』4級と『トウミ』5級の語彙項目がそれぞれ何項目ずつ含まれていたかを示したものである。

『手引き』4級、『トウミ』5級とも、出題は語彙リストの範囲内でなされることになっているが、18～24回で15～24項目、26～28回で19～34項目のリスト外の語彙項目が含まれていた。これらの多くは人名などの固有名詞、発音・綴り問題の誤答、解答に直接関係しない語、日本語の意味が付された語であったが、これに該当しない項目が各回とも3～15項目ずつあった。

図7 『手引き』4級および『トウミ』5級語彙の各試験での出現状況 (異なり語彙項目数)

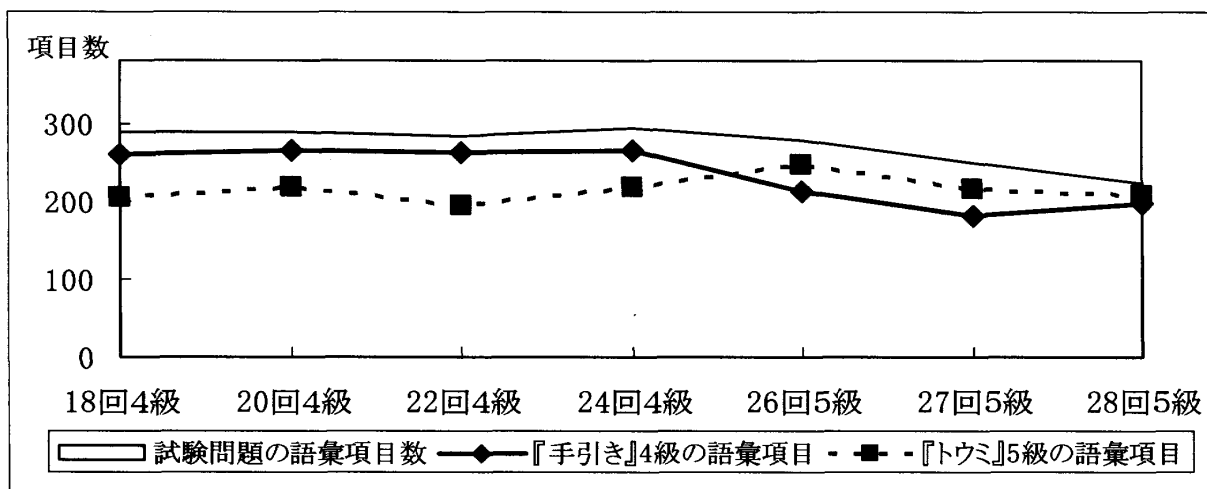


図7によれば、18回から24回までの4級の問題には『トウミ』5級にない語彙項目がある度含まれているが、26回から28回までの5級の問題には『手引き』4級にない語彙項目はほとんど含まれていない。つまり、『手引き』4級から『トウミ』5級への改定で入れ替わった語彙項目は、実際の試験問題にあまり現れていないのである。現に、前項で指摘したような問題のある合成語や連語は今のところ出題されていない。これは、そのような問題のある材料を使わなくとも十分に当該レベルの到達度を測る問題は作れるということの意味しているのではないだろうか。そうであるなら、もう一度、出題基準における合成語や連語の扱いを抜本的に検討し直してはどうだろうか。

また、試験問題の異なり語彙項目数が27回と28回で減少しているが、難易度の下方修正を窺わせるものであると言えよう。

2.3.2 文法項目

文法項目については、『手引き』に基づく第18～24回（偶数回のみ）試験には、基準で示された文法項目がほぼ出尽くしていたが、『手引き』に基づく第26～28回試験では、次のようなものはまったく現れなかった。

N 같다 N가/이 아니라 -거든요 -고 오다
 N와/과 같다 N와/과 같이 N를/을 향하다

もちろん、改定後の実施回数がまだ少ないので今後出題されるのかもしれないが、これらの多くは、教科書の高共通度文法項目にも現れないものである。したがって語彙項目についてと

同様、これらを5級の文法リストから削除する方向で検討してもよいのではないだろうか。

反対に、文法リストに載っていないのに出題内容に使用された文法項目としては、同じ文法形式に複数の用法がある場合で、文法リストに載っていない用法が使用されたものがいくつか見受けられた。

例えば、第20回4級筆記問題に、「쓰고 남은 돈 (余ったお金)」という文の日本語訳を選択させる問題があるが、『手引き』4級の文法項目として挙げられている「-고」が並列用法のみであるのに、誤って完了用法を用いた例であろう。

また、第26回5級筆記問題に「남편과 둘이 살아요 (夫と二人で暮らしています)」とあるが、この「둘이」は「둘이서」の「서」が省略された形で、これは5級の出題範囲には示されていない文法項目である。

さらに第26回5級聞き取り問題に「무슨 바지를 입었어요?」の日本語による意味を選択する問題があるが、ここでは、「입다 (履く)」が語彙リストにある意味(着る)以外の意味で用いられている点と、ここでの「-았-」は単純な過去を表すものではなく、過去の動作の結果状態を表す用法である点で、受験者にとって未習事項である可能性が高い。

文法項目は、一般に語彙項目より時間をかけた説明や練習などによって初めて習得されるものであるだけに、出題範囲外の事項が誤って混入しないよう、ましてやそれが解答のポイントになることのないよう、十分に留意する必要がある。

2.4 試験問題の形式・内容

最後に出題の形式および内容について検討してみよう。

本稿で分析の対象とした試験問題の出題形式を類型化すると、表7～表10のとおりである。表中のKは「韓国語」を、Jは「日本語」を意味し、各表最上欄の数字は試験の実施回を表す。各回で採用された出題形式に○をつけた。部分的に該当する場合は△をつけた。

出題形式の上でも、韓国語の問題文に日本語の訳がつくかどうかという点や、韓日または日韓の翻訳を単語対単語でするかどう点、或いは文の長さの点で、『トウミ』5級は『手引』4級に匹敵するか凌駕する難易度となっていることがわかる。

第18回の5級の問題に韓国語のカナ表記と日本語のハングル表記の選択問題が導入されたが、第22回にはほとんど姿を消してしまった²³。日本で韓国語を学習する日本語母語話者にとって、韓国語の音韻体系と日本語の音韻体系を意識化するのに韓国語のカナ表記、日本語のハングル

23 第22回5級、第24回5級には日本の地名のハングル表記が語彙の問題として1問だけ出題されている。

表7 ハングル検定5級筆記問題の出題形式

出題形式		18	20	22	24	26	27	28
1	K単語のカナ表記を選ぶ。	○	○	○				
2	K単語の発音のハングル表記を選ぶ。					○	○	○
3	J固有名詞のハングル表記を選ぶ。	○	○	△	△			
4	J単語に相当するK単語を選ぶ。			○	○	○	○	○
5	絵に相当するK単語を選ぶ。	○	○	○				
6	他のK単語と関連の低いK単語を選ぶ。					○		
7	K文の穴あき部分(K単語)を選ぶ。(全文J訳あり)	○	○	○	○			
8	K文の穴あき部分(K単語)を選ぶ。(J訳なし)					○	○	○
9	K文の一部と最も近い意味のK語句を選ぶ。(J訳なし)					○	○	○
10	K文の穴あき部分(K助詞・用言の活用形)を選ぶ。(全文J訳あり)	○	○	○	○			
11	K文の穴あき部分(K助詞・用言の活用形)を選ぶ。(J訳なし)					○	○	○
12	K対話の中のK文を選ぶ。(J状況説明あり・J訳なし)	○	△					
13	K対話の中のK文を選ぶ。(J状況説明なし・J訳なし)		○	○	○	○	○	○
14	J文(決まり文句)のK訳を選ぶ。	○	○	○	○			
15	J場面に応じたK文(決まり文句)を選ぶ。					○	○	○
16	やや長いK対話の流れに合う語句・絵を選ぶ。					○	○	○

表8 ハングル検定5級聞き取り問題の出題形式

出題形式		18	20	22	24	26	27	28
1	発音されたK単語を選ぶ。	○	○	○	○			
2	発音されたK単語の意味を選ぶ。	○	○	○	○			
3	発音されたK文(決まり文句)が使われる場面を選ぶ。	○	○	○	○			
4	絵を見ながらJ質問に対するK答えを選ぶ。	○						
5	発音されたK文(一般文)の意味を選ぶ。	○	○	○	○	○	○	○
6	発音されたK単語のJ意味を選ぶ。		○					
7	発音されたK文の一部のJ意味を選ぶ。(質問部分以外の部分のJ訳あり)	○	○		○			
8	発音されたK文の一部のJ意味を選ぶ。(質問部分以外の部分のJ訳なし)			○				
9	発音されたK質問への答えのJ意味を選ぶ。		○					
10	やや長いK文を聞き、J質問に対するJ答えを選ぶ。		○	○	○			
11	発音された数を含むK語句を選ぶ。	○	○	○	○	○	○	○
12	発音されたK文の一部(K単語)を選ぶ					○	○	○
13	発音されたK文へのK応答文を選ぶ。					○	○	○
14	やや長いK文を聞き、K質問に対する答えの絵を選ぶ。					○	○	○
15	発音されたK対話についての発音されたK説明を選ぶ。					○		
16	発音されたK対話が行われた場面を選ぶ。						○	○
17	カレンダーを見ながらやや長いK文を聞き、発音されたK質問への発音されたK答えを選ぶ。					○		
18	やや長いK文を聞き、発音されたK質問に対する発音されたK答えを選ぶ。						○	○

表9 ハングル検定4級筆記問題の出題形式

	出題形式	18	20	22	24	26	27	28
1	K単語の発音のハングル表記を選ぶ。	○	○	○	○	○	○	○
2	K文の穴あき部分（K単語）を選ぶ。（J訳なし）	○				○	○	○
3	K文の穴あき部分（K語句）を選ぶ。（J訳あり）		○	○	○			
4	他のK単語と関連の低いK単語を選ぶ。					○	○	○
5	K文の穴あき部分（K助詞・用言の活用形）を選ぶ。（J訳あり）		○	○	○			
6	K文の穴あき部分（K助詞・用言の活用形）を選ぶ。（J訳なし）	○				○	○	○
7	K用言の活用形を基本形に戻す。						○	
8	K対話の中のK文を選ぶ。（J訳なし）	○	○	○	○		○	○
9	K対話の中の穴あき部分（K単語）を選ぶ。（J訳あり）	○	○	○	○			
10	K対話の中の穴あき部分（K単語）を選ぶ。（J訳なし）					○	○	
11	K文の一部と最も近い意味のK語句を選ぶ。（J訳なし）						○	○
12	K文の一部または全部のJ訳を選ぶ。	○	○	○	○			
13	J文の一部または全部のK訳を選ぶ。	○	○	○	○			
14	漢字語のハングル表記を選ぶ。	○	○	○	○			
15	やや長いK文の内容と一致するK文（2文）の組み合わせを選ぶ。	○	○	○	○	○	○	○
16	やや長いK文の内容と一致しないK文（1文）を選ぶ。					○	○	○
17	やや長いK対話の流れに合う穴あき部分（K語句）を選ぶ。	○	○	○	○	○	○	○
18	K文の一部の言い替えとして不適切なK語句を選ぶ。					○		

表10 ハングル検定4級聞き取り問題の出題形式

	出題形式	18	20	22	24	26	27	28
1	発音されたK語句を書かれた選択肢から選ぶ。	○	○	○	○	○	○	○
2	発音されたK対話が行われている場所を選ぶ。					○	○	○
3	発音されたK対話が何についての対話かを選ぶ。							○
4	絵を見ながら発音されたK質問に対するK答えを発音された選択肢から選ぶ。	○	○	○	○			
5	発音されたやや長いK文・対話の内容について発音されたK質問の答えとなる絵を選ぶ。					○	○	○
6	発音されたK文への発音されたK応答文を選ぶ。	○	○	○	○	○	○	○
7	発音されたK文の一部または全部のJ意味を選ぶ。		○	○	○	○	○	○
8	発音されたJ文の一部のK意味を選ぶ。			○	○			
9	発音された文の一部を書く。	○	○					
10	発音されたK文の一部のJ意味を書く。（他の部分のJ訳あり）	○						
11	発音されたやや長い文の内容と一致するK文を選ぶ。					○	○	○
12	やや長いK対話を聞き、K質問に対するK答えを選ぶ。					○	○	○

表記を利用するのは有効な方法である。表記法のような瑣末な問題に紙面を割くより、もっとコミュニケーションな問題を、という方針によって削除となったのであろうが、言語の構造的理解を担保する意味で、全面的に切り捨ててしまうには惜しい問題形式である。

受験者アンケートで、従来の試験は「単語の試験」だと指摘されたというが、この点については、2006年の改定以降、かなりの改善を見たと考える。

従来、5級と4級の問題の一部で、主として穴埋め問題において、全体が語彙リスト内の語彙で構成されている文であっても、直接解答と関わらない部分に日本語訳が添えられてきた。問題のポイント以外の部分が分からなかったために、できるはずの答えができないというような事態を避けるための配慮であったと思われるが、それによって、これらの問題が、結局はある単語を知っているかどうかのみを問う問題に留まる結果となってしまっていた。

しかも、5級で2002年に、4級では2004年にマークシートへの全面移行が完了し、筆記式がなくなったことによる問題の平易化と相まって、全体的な難易度の低下につながったと思われる。絵や表を介在させたり、ある表現の用いられる場面を問う、或いはその逆に場面から表現を問うなど、よりダイナミックな言語使用に近い形を目指そうという努力もなされたが、ほとんどの問題が、結局はある単語や表現に相当する語句を4つの選択肢の中から選ぶという形式から抜け出せずにいたことは事実だった。

本来、出題範囲を示した語彙リストが公表されていて、そのリストの範囲内の語彙で文が構成されているのであれば、その文全体を韓国語で読み取った上で問題となる部分を選択する形式のほうが望ましいと思われる。仮にその文の一部がよくわからなかったとしても、前後の脈絡から何とか答えを導き出していくのが、現実の言語使用に近いはずだからである。

その意味で、語彙や文法の知識を問う問題が多くを占めていた既存の形式から、文脈を読み取って判断するという、実際の言語行動に近い様々な形式が数多く取り入れられた2006年以降の出題形式の変更は評価したい。

ただし、そういった問題形式への変更を周知させることなく、突然ほとんどの日本語訳を消してしまったことで、受験生の中に当惑と混乱を招いたことは事実であり、残念なことである。このような措置により問題の難易度が一気に上昇するであろうことをあらかじめ予想し、受験生に対して十分な周知および準備の期間を与え、極端な変動が現れないよう留意するなどの配慮が必要だった。

また、個々の問題の中身については、似たような話題や表現、似たような質問のポイントに偏る傾向がある点、対話のやりとりが不自然なところがある点など、課題は多い。

総じて2006年以降の問題形式は、マークシート式でありながら、できるだけ現実のダイナミックな言語行動に近い形で、学習者の学習の成果を測る問題となるよう、努力した成果が現れていると考える。今後もさらなる改善のための研究に努めてほしい。

3. まとめ

本稿は、2006年に改定されたハングル能力検定試験5級、4級の出題基準と、これに付随した語彙および文法項目などのリストの内容を、2002年改定の出題基準および語彙・文法リストなどと比較しつつ、その妥当性を検証し、出題内容についても語彙・文法・出題形式の面から検討を加えた。

2006年『トウミ』による出題基準の改定は、その方針の方向性、出題意図及び形式の面で、総じて望ましい方向への変化を遂げたと考える。ただし、その中身となる語彙項目、文法項目の配分にはかなり問題があること、特に語彙項目と関連した合成語や連語の扱いに大いに問題があることを指摘した。

今後の方向性としては、各級、特に初級段階にあたる5級、4級に配分される言語材料および出題内容として、どのようなものが妥当なのか、どのようなものが求められているのか、本検定の社会的位置づけと各級のレベル設定方針に照らし合わせつつ、精査する作業を推し進める必要がある。また、出題形式および内容が偏った方向に収斂してしまうことなく、常に開かれた姿勢で、より多様な試みを模索して行ってほしいものである。

検定試験とは、学習の成果を客観的に測ることが最大の目的ではあるが、同時に学習の成果が結果となって現れることで達成感を得、さらなる学習へと勇気づけるようなものであるべきである。あまりに簡単で大した努力もなく合格できる問題や、単に単語の知識を問うだけの問題は好ましくないが、学習者に混乱と失望を抱かせることは、さらに好ましくない。『トウミ』の序に掲げられたように、真に「学習者に対して、その学習成果の客観的な評価と更なる向上への刺激を提供する」ハングル検定になることを期待する。

参考文献

- 国際文化フォーラム (2005) 『日本の学校における韓国朝鮮語教育—大学等と高等学校の現状と課題—』財団法人国際文化フォーラム
- 長谷川由起子・李秀炅 (2006) 『韓国語初級教材の語彙調査—教科書15種に現れた語彙的学習項目』白帝社
- ハングル能力検定試験出題基準検討委員会 (2002) 『ハングル学習の手引き』ハングル能力検定協会
- ハングル能力検定協会 (2006) 『「ハングル」検定公式ガイド 合格トウミー合格レベルと語彙リスト—初・中級編』ハングル能力検定協会
- ハングル能力検定協会 (2002~2007) 第18回・第20回・第22回・第24回・第26回・第27回・第28回「ハングル」能力検定試験4級・5級筆記・聞きとり・書き取り問題 (冊子・テープ)
- 하세가와 유키코・이수경 (2002) ‘한일 한국어 교재의 문법 실러버스 비교 분석—일본 학습자를 지도하는 관점에서—’, 『한국어 교육』 제13권 2호, pp.247~278, 국제한국어교육학회
- フランス語教育振興協会ホームページ <http://www.apefdapf.org/>
- ドイツ語技能検定試験ホームページ <http://www.dokken.or.jp/>
- 日本中国語検定協会 <http://www.chuken.gr.jp/>